令和７年度
教育・保育実践コンパスレポート

～乳幼児教育支援センター事業報告書～

私たちの教育・保育をもっと楽しく！

世田谷区乳幼児教育支援センター

モデル研究最終報告 …… 1

園・校における架け橋期の教育の充実

【みどりの学び舎】八幡山小学校・八幡山幼稚園・松沢保育園 …… 2

【砧の学び舎】砧小学校・砧幼稚園 …… 4

園の教育・保育の評価

ベネッセ桜新町保育園 …… 6

中町幼稚園 …… 8

西之谷保育園 …… 10

実践充実コーディネーター派遣事業報告 …… 13

育成幼稚園 …… 14

えにっくす八幡山保育園 …… 15

上用賀青い空保育園 …… 16

給田保育園 …… 17

給田幼稚園 …… 18

豪徳寺保育園 …… 19

世田谷保育園 …… 20

世田谷ほしにねがいを保育園 …… 21

桜保育園 …… 22

太子堂保育園 …… 23

第二いちご保育園 …… 24

玉川保育園 …… 25

ふじみ保育園 …… 26

フロンティアキッズ上馬 …… 27

南大蔵保育園 …… 28

南八幡山保育園 …… 29

遊愛保育園 …… 30

わかくさ保育園 …… 31

令和７年度乳幼児教育支援センター事業報告 …… 32

モデル研究最終報告

【みどりの学び舎】
世田谷区立八幡山小学校　世田谷区立八幡山幼稚園　世田谷区立松沢保育園

「園・校における架け橋期の教育の充実」
～子ども同士の関わりの中で生き生きとできる子ども～

講師　武蔵野大学　箕輪　潤子氏

【研究概要】

本区のテーマ「園・校における架け橋期の教育の充実」を受け、本校・園では研究主題を以下のように設定した。

「子ども同士の関わりの中で生き生きとできる子ども」

令和６年度は研究副主題を「異校種間における交流活動を通して」とし、交流活動の再構築を重点的に取り組んだ。

令和７年度は研究副主題を「環境構成を備えた授業づくりを通して」とした。就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続のための意図的・計画的な交流活動の推進を図るとともに、小学校では幼児教育の「子どもの主体的な活動を大切にし、適切な環境の構成を行う」という考え方を取り上げ、幼児教育における環境構成を小学校教育にも生かす授業づくりをめざした。

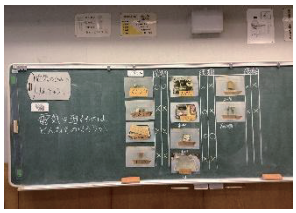
（生き生き）

自らすすんで人・もの・ことに関わり、より多くのことを学ぼうとする姿

（環境構成）

子どもが発達に必要な体験を積んでいくことができるような状況をつくり出すこと

（授業づくり）



子どもが「わかった」「できた」という達成感を得られる学習活動のこと

【研究方法】

①意図的・計画的な交流活動の実施

幼稚園・保育園５歳児	⇔	小学１年生児童
幼稚園・保育園５歳児	⇔	小学２年生児童
幼稚園・保育園５歳児	⇔	小学５年生児童
幼稚園・保育園４歳児	⇔	小学４年生児童
保育園３歳児	⇔	小学３年生児童

幼稚園及び保育園の５歳児と小学１年生が就学前に関わることにより、小学校段階で１・２年生となり、より円滑な教育活動ができる。また、５歳児と５年生では、小学校段階で１年生と６年生の関係を就学前に構築できるようにすることで、小学校に対する子どもの安心感を高めることができる。交流に際しては、事前に打合せや指導案検討の場を、事後には振り返りの場を３つの園・校が合同で設け、充実した内容となるようにした。

②授業研究（年８回）の設定＊＿＿＿幼稚園及び保育園と連携・交流した授業

5月	6月	9月	10月	10月	11月	12月	1月
５歳児	６年生	２年生	３年生	５年生	４年生	４歳児	１年生

子どもが見方・考え方を生かしながら環境構成に配慮された授業を受ける中で、主体性を発揮することができたかを捉えるために、幼稚園・保育園で２回及び小学校で６回の授業研究に取り組んだ。その際、研究主題に迫るための手立てとして、「学習活動の工夫」「物的環境の工夫」「空間的環境の工夫」「教師の役割」の視点を設けた。

【実践例】第２学年　生活科　「レッツ！ひらめきこうじょう」

①本時のねらい

動くおもちゃづくりを通して、材料やつくり方を試行錯誤しながら、友達や５歳児と楽しく遊ぶ。

②授業の工夫

CMづくり

よく動くおもちゃづくりのためのひらめきや工夫を、分かりやすく伝えるために、要点をCMにまとめて事前に５歳児に届けた。５歳児はCMを見たことで、本時で何をするか明確になり、期待をもつことができた。

十分な素材の確保

子どもたちがイメージするつくりたいものを、思い描いた通りに具現化できる環境を整えた。材料は十分な量を用意し、それぞれ表示を付けて分類した。割り箸や輪ゴムなどは長さや太さを分けて複数の種類を用意することで、試行錯誤しやすいようにした。

５歳児に伝え、一緒に考える時間の設定

展開の３５分間は、「つくる→試す→改善する」の流れを意識しながら、動くおもちゃを５歳児とともにつくる時間とした。これまで積み上げてきたおもちゃづくりの気付きやひらめきを、５歳児に伝えることで、自分の思いを伝え合う良さに気付けるようにした。

③５歳児にとって

２年生が５歳児の思いに寄り添ってくれたことで、５歳児はイメージしたおもちゃをつくり遊ぶ満足感を味わうことができた。

【講師からの指導講評】
・教師が授業の展開の中で、場を広げたり、コースを工夫したりと環境を再構成する場面があった。
・「場」「人」「もの」「時間」の４つの観点から環境が構成されていた。「時間」に関しては、児童の学習としての時間の流れと、５歳児の遊びの経験としての時間の流れの差異をどう埋めるかが課題である。

【砧の学び舎】世田谷区立砧小学校　世田谷区立砧幼稚園
「園・校における架け橋期の教育の充実」
～架け橋期のカリキュラムの作成を通して～

講師　武蔵野大学　箕輪　潤子氏

〈昨年度からの取組みの状況と課題〉

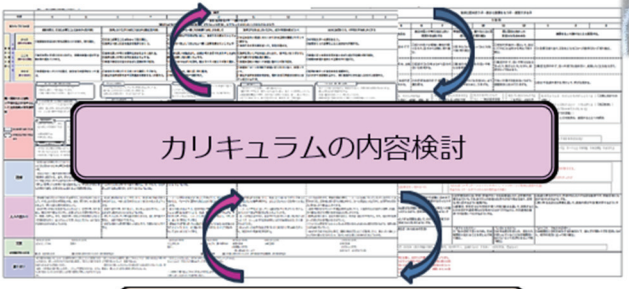
・研究の１年目として、年間を通して１年生の担任と幼稚園の教員とで見学や話し合いを積み重ね、学び合いや連携の体制づくりに取り掛かった。

・２年目として、持続可能な連携にするため、教育計画に位置付けを行っていく。架け橋期の子どもの育ちの連続性を大切にしたカリキュラムを作成する。また、育みたい姿をもとにした園・校での活動や教科での実践の工夫を整理することで、活用しやすいカリキュラムをめざす。

〈砧幼稚園・砧小学校の架け橋期のカリキュラム作成の全体像〉

幼稚園と小学校での教育の相互理解

・新年度当初の様子の見学
・学び舎・地域公開日の参観
・研究保育・研究授業や協議会への参加
・写真等を用いた日々の様子の情報交換
・運動会等の行事の参観



カリキュラムの内容検討

保育・授業実践と振り返り

園・校において互いに得た学びをそれぞれの教育計画に活かし、実践する

（例）　幼稚園　小学校
シャボン玉遊び⇔なつとあそぼう
秋の自然物での遊び⇔あきとともだち

〈カリキュラムの内容について話し合う〉

興味のあることや好きなことを活かして経験を積んでいってほしいと思っています。

【めざす子ども像を設定】
園・校の子どもの実態を出し合い、見えてきたよさや課題から、幼小でどんな子どもを育てていきたいかを共通理解する。**共通のめざす子ども像をもつことで同じ方向を向くことができた。**

友達と認め合い、自信をもつ子を育みたいですね。

幼稚園の先生

小学校の先生

「こころ」には思いの表出や友達との関わりを記入してみました。

【５つの期ごとに育みたい子どもの姿を出し合う】
３つの柱（からだ・こころ・まなび）ごとに具体的な姿を出していく。**育てていきたい力をイメージしやすく、育ちの連続性が見えてきた。**

育みたい子どもの姿を考える中で、「安心」という捉えも園と学校ではイメージしている姿が違いますね。

生活の中での育みたい子どもの姿を書き起こすことはあまりないですが、やってみると理解の深まりや新たな発見があります。

幼稚園では興味に応じて自分で選ぶ「遊び」と、皆が経験する「活動」を工夫して複合的な育ちにつながるよう指導をしています。

【幼稚園の遊びと活動、小学校の授業の共有】
経験や学びが園と学校でどのようにつながっているかを考えた。
また、以下のことが分かった。
幼稚園では経験させたいことを計画的に踏まえ、幼児の興味・関心に基づいた遊びや活動の中で幼児が自ら学べるよう援助している。
⇕
小学校では教科のねらいに即して、児童が課題を立てそれぞれのやり方で解決していき、資質能力を高めるよう指導している。

幼稚園での「遊び」と「活動」の違いは何でしょうか？

4月に1年生を見学した際、見通しのもてる分かりやすい表示がとても有効だと感じました！

【環境や大人との関わり、振り返りの欄の作成】
互いの見学を基に気付きの共有をした。その際、指導方法や内容に違いが見られたが、**「育みたい姿」にどうつながるかを視点とすることで、大切にしている点が見えてきた。**

環境の工夫に幼小のつながりが見えるよう記載してみましょう。

【カリキュラムを活用していく】
互いの実践や見学で見られた姿がどのようにして育まれているのか、その姿がどのようにつながっていくのか、作成したカリキュラムを話し合いに活用していった。

★カリキュラム作成中や授業・保育見学の振り返りの中での一コマ★

(小) 小学校では、すべての授業にねらいがあり、課題を立て、解決のためにそれぞれのやり方で学習します。幼稚園の主体性重視の考えが、小学生になっても活かされています。

(小) 協同製作楽しそうに作っていましたね。大きなメリーゴーランドはびっくりしました。どんな風に作ったんですか。

(幼) 園児のやりたいことを取り上げて主体的に取り組めるようにしました。

(幼) 幼稚園では「幼児が主体的に関われるか」を大切にしています。運動会のように年間で位置付けている活動も、幼児の実態を踏まえて自発的に取り組める導き方を試行錯誤しています。

(小) 園児が考えたことを実現していけるような環境や手立てがあり、年少児、保護者、未就園児との関わる機会が設定されていていいなと思いました。小学校でも図工だけでなく、生活科や国語等でも合科的に取り組んでいきたいです。

➡カリキュラム作成がゴールではなく、カリキュラムを活用しながら育ちを読み取り、指導に活かしていく。その際に生まれる疑問や違和感から幼稚園と小学校の違いを共通理解し、それぞれのよさを大切にしながらブラッシュアップしていけるとよい！

〈**実践事例**〉１年生生活科「あきとともだち」
幼稚園から小学校へ自然物への興味、遊びや活動に取り入れて楽しむ経験をつなぐ

幼稚園で秋探しをし、園児のためにおもちゃを作りたいと思いが生まれる

園児に楽しく遊んでもらいたいという気持ちをもって工夫して作る

園におもちゃが届き、園児は手紙を読みながら遊ぶ

秋を身近に感じ、多様な触れ方や楽しみ方ができる環境の工夫が大切！

相手意識をもつことで、児童の主体的な姿が育まれた。一緒に遊ぶなど、相手が目の前にいるとより相互の思いが伝わりそう！

〈成果と今後に向けて〉

- **カリキュラムを作成しながら、教員同士が互いの見学後に意見を交換したり、保育・授業づくりのための情報共有をしたりすることで、互いの教育についてより知ることや活かし合うことができた。また、振り返り時にカリキュラムの中の子どもの姿を思い起こすことで、学びのつながりを見出しやすくなった。**
- **見えてきた幼稚園と小学校の違いは、時として架け橋期の学びをつなぐ難しさに感じられたが、互いの教育への理解を深め合う視点となった。また、違いがあることを踏まえた上で互いの良さを尊重し合い、取り入れることで保育・授業の改善が見られた。**
- **年間を通しての教育活動を振り返りながら、来年度に向けて４月のカリキュラムに計画的に反映させていく。今後の架け橋期の取組みとして、設定された交流の活動でなくても、主体的に関わり合える子ども同士のつながりが生まれるような連携の充実を学校・園全体でめざしていく。**

株式会社ベネッセスタイルケア　ベネッセ桜新町保育園
「園の教育・保育の評価」
～振り返りの達人を極めよう　1/35のその子らしさに着目して～

講師　和泉短期大学　松山　洋平氏
和泉短期大学　星　早織氏

今年度のテーマ設定の理由

昨年度は、振り返りの内容が保育者の反省や子どもの評価に偏りやすく、振り返りの質にスタッフ間で差があることを課題と捉え、「子どもの内面の理解に繋がる振り返り」を目指して取り組んできた。具体的には、クラスでの振り返りの時間を毎日確保し、昼礼やノンコンタクトタイムを活用してその子について考える時間を設けていった。また、環境面では子どもの作りたい思いをすぐに実現できるよう素材を日常的に配置したり、イメージを膨らませられるようレイアウトを工夫したりした。二年目となる今年度は、引き続き「その子らしさ」の理解を深める振り返りを行いながら、子どもの姿をどのように次の計画へ活かすかという視点で、「明日に繋がる保育の振り返り」を目指すこととした。

方法と内容

①ドキュメンテーションの記録の質を変化させた

・保育日誌としてのドキュメンテーションの作成

・保育所保育指針解説書を振り返りに活用し、目指すべき育ちと照らし合わせながら子どもの姿を捉え直すことを行ってきた。

「ドキュメンテーションを見ればその子の育ちがわかる」を意識

②保育のプロセスに注目して子どもの育ちを振り返る

保育のプロセスに注目し、５歳児クラスの夏祭りでの実践をもとに子どもの育ちを振り返り、『**見方が変わると関わりが変わる―保育者のまなざしに基づく保育実践**』として意味付けを行った。

〈実践〉

夏祭りで『ぐりとぐら』の絵本をきっかけに、5歳児によるたまごお神輿作りが始まった。その終着点として絵本の世界から広がる活動を行ったが、その中で積み木で作っていたカステラづくりのためのボウルが崩れてしまった。

→それを受けてAくん「あきらめないぞ、ぐりとぐら！」その言葉をきっかけに、周りの友だちも「あきらめないぞ、ぐりとぐら！」と崩れた積み木を再び積み始め、遊びが続いていった。

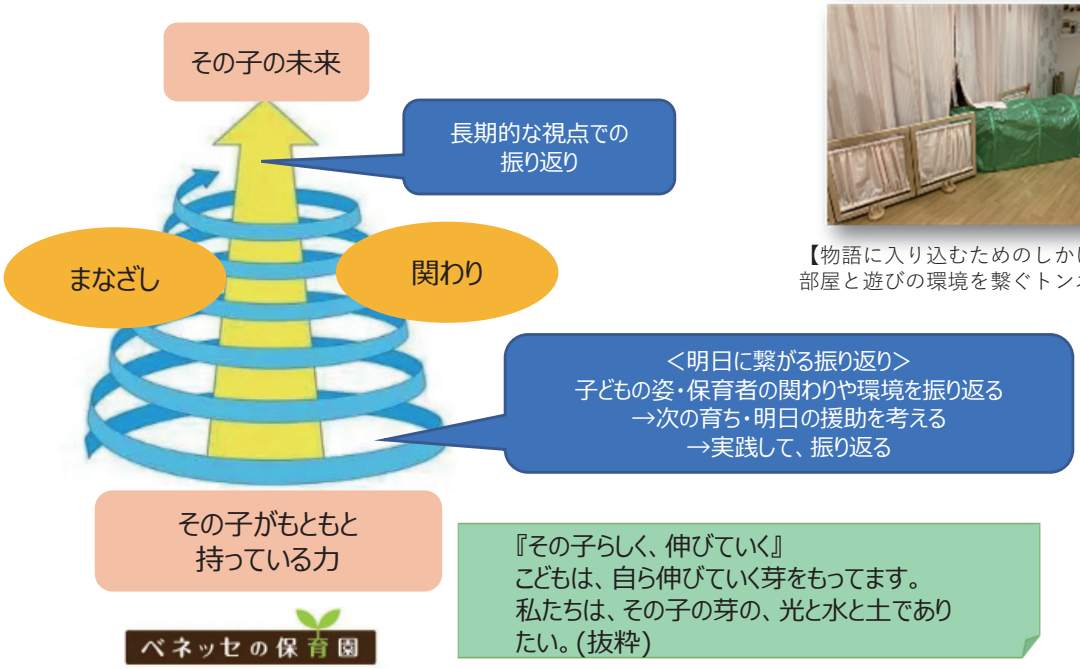
あなたが見ている世界を一緒に見ましょう、と共に関わる関係

このAくんの姿が印象に残ったことから、**「なぜ、あの時、保育者の心が動いたのか」という視点で振り返る**ことにした。私たちが大切にした視点は、Aくんの「その子らしさ」→Aくんの「その子らしさ」を捉えるために、この場面に至るまでのAくんの育ちと私たちの関わりのプロセスを長期的に振り返った。二年前、Aくんが3歳だった頃の姿は、棚の上で積み木同士を打ち付けて遊んでいたり、友だちの輪から少し離れた場所で遊んだりすることが多かった。その姿を見て「集団になじめていないのではないか」「一人で遊びの世界に浸っているのではないか」という【評価的に観察するまなざし】を向けていたが、Aくんへの関わりを模索していく中で、「Aくんは、一人でじっくり遊ぶことを楽しんでいる」「自分なりの遊びのイメージが豊かなのかもしれない」という【理解しようとする横並びのまなざし】へと変化させ、Aくんを理解しようとする姿勢を向けていったのだ、と振り返った。

〇保育者のまなざしが変わったことで関わり方も変化し、その積み重ねが4歳児でのAくんの成長へとつながり、さらに年長での姿へと結びついていったことに気付いた。

Aくんのこれまでの育ちを振り返ったうえで同じ場面を捉え直すと、あの発言にはAくんの豊かな想像力や物語の世界に入り込む力が表れており、Aくんらしさが存分に発揮された場面だったからこそ私たちの心が動いたのだと分かった。さらに二年前までさかのぼり、3歳の頃のAくんの姿を含めて保育のプロセスを振り返ることで、その力はAくんがもともと備えていた力であったことに気付いた。

【物語に入り込むためのしかけ】
部屋と遊びの環境を繋ぐトンネル



世田谷区教育・保育実践コンパスに、『子どもの力を育む保育のプロセス』とありますが、私たちの言葉で言い換えると『その子がその子らしさをよりよくしようとすること』と、捉えました。

上記のベネッセのブランドメッセージにもありますが育つ土台は既に子ども自身が作っていて、もちろんそのことに本人は気付いていません。もともと持っている力が発揮されるためには、環境の一つである私たち保育者のまなざし、そして関わりが重要になります。

まとめ・今後の課題

・日ごとの振り返りの積み重ねがあったからこそ、もう一度振り返ることでその子のもともと持っている力に気付くことができた
・その子がその子らしく生きようとしているところをみる視点の大切さ
→園生活だけではなく、その子の人生を長期的に捉えていくことを実践していきたい。
幼児教育と小学校教育の学びが円滑に接続していけるように、幼保小連携にもアプローチしていきたい。
・視点を持って振り返ることの大切さに気付いた
→今後それを全クラスの振り返りにもつなげていけるように方法を検討していきたい。
・感性と表現の領域を入り口にした保育の実践研究をしたい。

世田谷区立中町幼稚園
「園の教育・保育の評価」
一人一人が笑顔で園生活を送るために
～振り返りを通して明日につながる保育を考える～

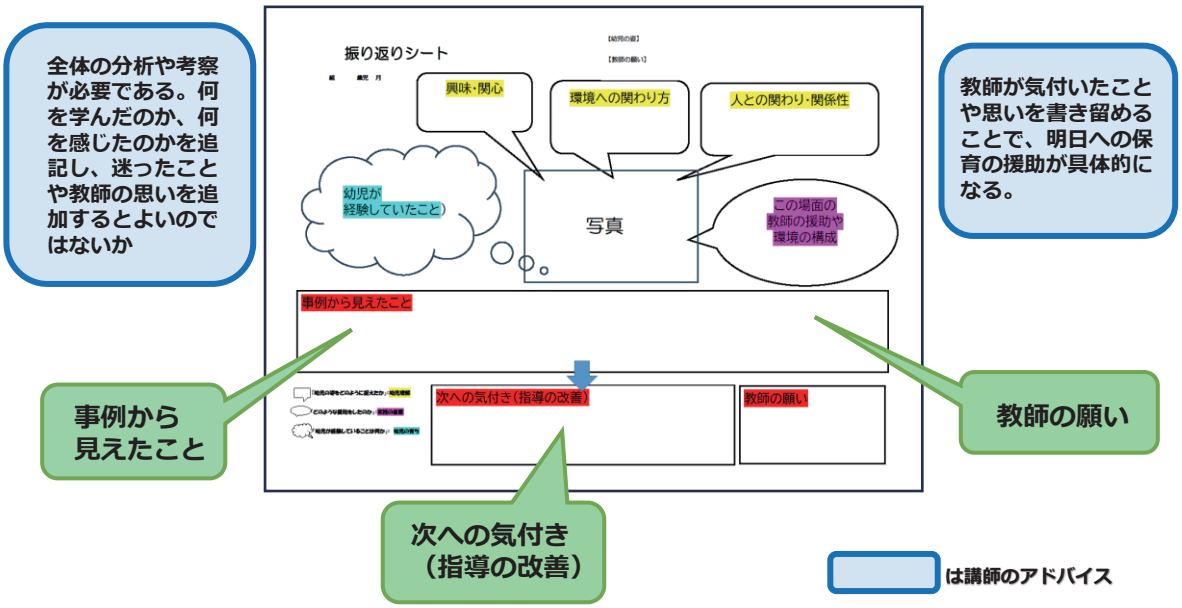
講師　東京成徳短期大学　　大澤　洋美氏

東京成徳短期大学　　小坂田　摩由氏

昨年度に引き続き「一人一人が笑顔で園生活を送るために～振り返りを通して明日につながる保育を考える～」を研究テーマに取組みを行った。今年度の幼児の実態から本園の課題を見直した。課題として「個別最適な学びの保障」「多様性に配慮した学級経営の工夫」「教師のキャリアに応じたスキルアップ」がある。昨年度の取組みを活かし、全ての幼児が安心して自分のやりたいことを見付け、充実した日々を過ごせるための園の教育・保育の評価に取り組んだ。

1．振り返りシート

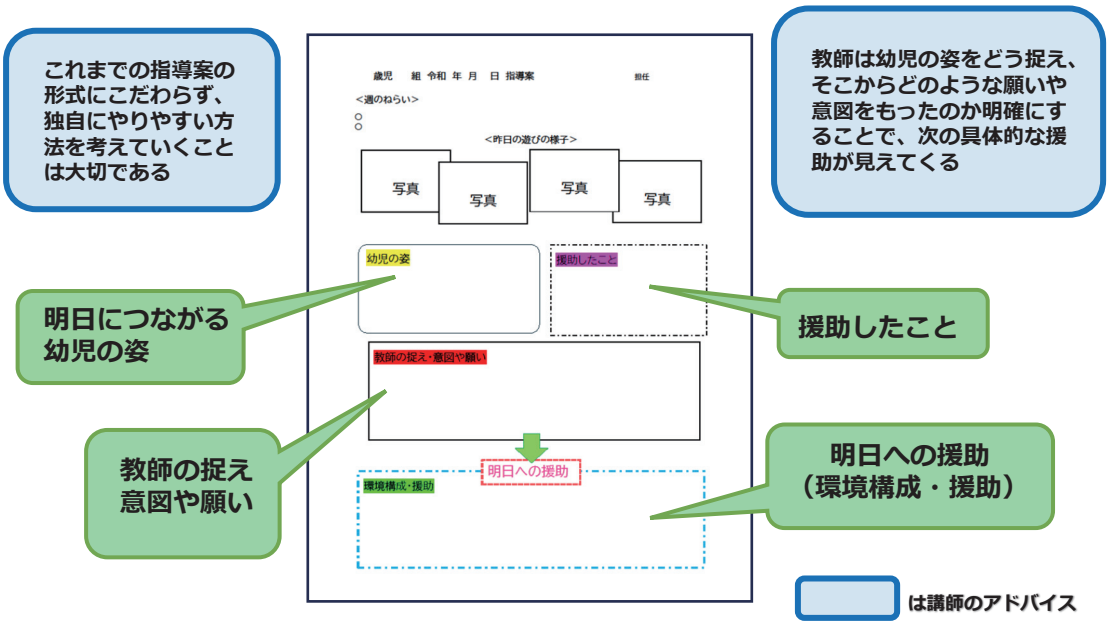
「振り返りシート」を活用し、皆で語り合いながら保育の振り返りを行った。講師の先生から、教員のキャリアに応じた振り返りと実践についてアドバイスをいただいた。シートの項目を精査し、「事例から見えたこと」「次への気付き」「明日への教師の願い」に改良した。



2．記録と一体化した指導案

今までの指導案は、予測していた幼児の姿が変わることがあったため、援助や環境構成をより具体的にしたいと考えた。日々の保育記録に写真を用いて、教師の思いや気付きを書いていたことを活かして、指導案を作成した。写真を手掛かりに保育を思い返しながら「明日につながる幼児の姿」「援助したこと」を記録し、明日の援助や環境構成を考えた。

講師から「教師が捉えたこと・意図や願い」を書くことをアドバイスいただいた。教師の思いを明確にすることが、明日への援助を具体的に考えていくことにつながることを改めて確認した。



二年間の取組みを通して

- 明確な視点をもって保育を振り返り、教師の思いや感じたことをもとに保育の評価を行うことで、指導の方向性や明日の援助がより具体的になる。
- 保育の振り返りを丁寧に行うことは、幼児の日々の遊びが充実することにつながる。
- 自己のキャリアに応じて、日々の記録の仕方や指導案等を工夫し、教師のスキルアップにつなげる。

モデル研究を通して、自分の経験をもとに保育を展開するのではなく、目の前の幼児の姿を見て、仲間と保育を振り返ることで、保育に対する様々な価値観に気付き、自分の保育観や保育実践を見直すきっかけとなった。日々、新しい気持ちで子どもたちと向き合っていきたい。

世田谷区立西之谷保育園

「園の教育・保育の評価」
～子どもが楽しいと、保育者も楽しい保育園～

講師　昭和女子大学　遠藤　純子氏
昭和女子大学　鈴木　祥子氏

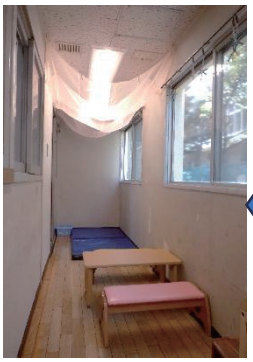
子ども主体となる保育の展開に必要なことは？
◎取組みのベースとなる「共通理解」をどう作っていくのか。
（時間は十分に取れている？その振り返りの方法はみんなに合っている？）

昨年度までの取組み

・「語る会」の実施
・「子どもにとって」をポイントにした振り返りと自己評価

実践

after



before

中廊下の
環境構成

「子どもたちが
ホっとできる
場所づくり」

年度が変わり、職員の入れ替わりがあったことで、改めてどのように共通理解をしていくかという難しさに直面した。子どものねがいを真ん中にした保育の振り返りをベースに、改めて今の子どもの姿を記録することからスタートした。

令和7年度の取組み

記録
①4歳児クラス子どもの姿を付箋に記録
⑥写真を撮る

子どもの理解
②付箋をもとにクラスで共有
⑦自然な姿の共有

計画と実践の振り返り
③訪問を受けて見えてきたこと

改善・充実に向けた検討
④職員全員での語り合い（世代別グループ）

実践
⑤できることから踏み出そう

「子どものねがいを真ん中に考える」

ミドル研修での公開保育

改善・充実に向けて取組みを進める中で…

『園全体での共通理解』というポイントから全員参加できる形で（世代別3グループ）率直に語り合う。

«気付き»　今の子どものねがいと昨年からの環境構成のずれ

「ホッとできる」「落ち着いて過ごせる」は今の子どものねがいではない

保育者は安全のためにも「落ち着いて過ごせる」場所だといいなという思い

この二つのねがいが合致しないことで、どうしてよいか悩み、停滞していた。

アドバイス

迷っているということは、保育者が子どものねがいを叶えたいと考え、保育者の思いとの間で葛藤をしているから。「子どものねがいを真ん中に」という意識が根付いてきている証拠。

«訪問を受ける中で»

〇日々の積み重ねを認めてもらえて、自身の保育を振り返るきっかけになった。
〇スモールステップでもよいので、まずは始めてみようという前向きな気持ちにさせてもらえた。
〇みんながどう感じて保育しているのか共有できる良い機会になった。
〇様々なことを取り入れながらのアップデートが必要だと感じた。
〇子どもが変われば、ねがいが変わる。

「明日が楽しみになる保育」に向けて

◎「環境はつながっている」　◎「環境にゴールはない」

みんなが同じ方向を向いて、ねらいを共有していることが大切

西之谷保育園の強み

子どものこと・自分の保育を語る力がある

それを発揮する環境を作っていくには？

肯定的に聴いてもらえる安心感・積み重ねたものを認めてもらえる嬉しさ
目を見てゆっくり聴いてもらえることでの充足感

実践充実コーディネーター派遣事業について

実践充実コーディネーター(養成校教員等の学識経験者)が、年3回程度、園を訪問し、自己評価充実のための支援を行います。

事業の目的

- 世田谷区教育・保育実践コンパスを活用しながら、自園の強みと課題を見出す。
- 教育・保育内容等の自己評価を実施する際の保育の振り返りと改善に向けた検討、評価結果の取りまとめに関する支援を行う。
- 自分たちの力でより良い保育実践を進めていくための支援を行い、保育の質の向上を図る。
- 保護者や地域の関係者などに向けた評価結果の**公表に関する**支援を行う。

☆自己評価の結果の公表について

コーディネーター派遣事業の取組みを、近隣の教育・保育施設などに向けて公表し、参加園と語り合うことにより、保育者としての専門知識や技術を広げ、自園の強みを活かした保育の質の向上につなげます。

☆地域への公表　実施園・参加園の感想

実施園

保育の様子を客観的に見て助言や意見、質問をしていただき、自分達の保育を振り返りながらも間違ってなかったんだと安心感や自信に繋げることが出来た。

自分の考えを口に出すことでより理解を深められたり、他の保育士の考えを知ることができた。また、他園の方に保育を見てもらい、評価していただけたことが自分の保育の自信になった。

参加園

子どもの様子や環境設定などより良くするための話し合いが、保育士たちの士気に繋がっているように思った。自園だったらどんなアドバイスがいただけるのだろうと考えた。

他園の保育を見せていただくことは、自園を振り返り、学びにつながるので良い機会になりました。ありがとうございました。

※令和7年度の感想です。

実践充実コーディネーター派遣事業報告

学校法人柏樹学園　育成幼稚園

「子どもに関する対話時間」を確保するために

コーディネーター：玉川大学　田澤　里喜氏
バディ　　：玉川大学　上田　よう子氏

年度当初の状況と課題

本園では行事を「子どもの興味・関心や経験を広げるチャンスであり、保護者に子どもの成長をご覧いただき、共に喜ぶ機会」と位置付けていた。一方で、行事の打合せや準備・片付け業務に多くの時間を割かれ、本来優先したい「保育や子どもについて教職員でじっくり対話する時間」を取りにくいというジレンマをそれぞれが抱えていた。

取組みの内容

本園の強みである「子どもたちが安心して遊べる環境・目に見えない心に寄り添う保育」を今後も大切にするためにできることを考えた。

◇子どもの姿や保育について、全教職員で対話する時間のゆとりの確保

・園行事の在り方の見直し…実施有無や時期･規模の見直し。「日常の保育の延長」を見ていただく。「映え」よりも子どもの主体性に、より重きを置く。保護者観覧型→参加型へシフトチェンジ。

・舞台の常設化…毎月誕生会など園行事の際に教職員で組立・解体をしていたホール舞台の常設を実践。

・主活動を週に1回お休みする…主活動の機会も大切にしながらも子どもの内面から湧き上がる「この遊び、もっとしたい！」の思いの尊重。安心して遊びを継続できる環境づくり。

◇コーディネーターのアドバイス

園の印象　・子ども達が穏やかである。

・好きな遊びを楽しんでいる。

・安心感を持ち、保育者が側から離れてもじっくり遊べている。

助言　・行事が減ることで、子どものことを語り合う時間の創出も可能。

・行事の見直しについては、当日だけでなく、それまでのプロセスの中で子どもが育つことを事前に保護者に伝え、理解していただくことが大切。

・会議は「決める」/「話す」を分ける。

・「10の姿」多角的な視点で一人一人の子どもを捉えること。

・姿を丁寧に捉え、安心を土台に「挑戦」していく姿を後押しする。

振り返りと今後に向けて

・保育の質を高めることを目標に掲げ、全教職員で子どもや保育に関して対話する機会が増え、大変有意義な事業であった。
・コーディネーターに、本園の保育の良さや子ども達の望ましい育ちを認めていただいたことが、教職員の大きな自信となり、よりポジティブな気持ちで保育に臨めるようになった。
・長年、それぞれがなんとか改善したいと思いながら、なかなか実現できなかった複数の業務について、思いきって変更・削減等、一歩踏み出すことができ、ゆとりが生まれた。
・行事を減らす、規模を縮小することについては保護者からいろいろな意見が出るなど、不安定な状況も予想される。園の「子ども達の遊びを大切にしたい」という思いを丁寧に発信していく。
・この事業での学びや気付きを今後も大切に活かしていくことで、より一層の質の向上を目指す。

特定非営利活動法人子育て支援ひまわり　えにっくす八幡山保育園

「ありのまま」を再考する　～職員同士による言語化と対話を通して～

コーディネーター：東京成徳大学　　坪井　瞳氏
バディ　　：十文字学園女子大学　近藤　有紀子氏

年度当初の状況と課題

子どもと保育者は２：１の配置人数で個々の育ちに合わせた関わりを充実させている一方で、職員の育成やノンコンタクトタイムの保障に課題があった。また、人員数が多いことで、欠勤者が多い日でも他クラスの休憩が回っていないことに気付かなかったり、クラスで使用した物の片付けをフリーの職員にしてもらうことが当たり前になったりするなど、職員同士の仲は良いが保育中に他のクラスに助けを求めたり、互いを気にかけることが希薄なことも課題であった。

取組みの内容

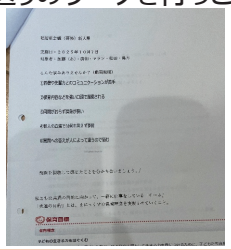
職員一人一人が「自分は意味のある存在としてここにいる」と実感できる職場環境を目指し経験年数・年齢が近い階層別での分かち合いの時間を持った。

課題の共有をすることで、自分だけの課題ではなかったなどの発見があった。

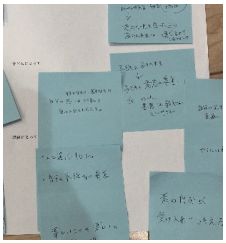
さらに園のスローガンである「ありのままでいいんだよ」を園にとって、子どもにとって、保育者にとって…と掘り下げていったことで「ありのまま」に対しての捉え方がそれぞれ違うという気付きに繋がった。そこでは、園にとっての「ありのまま」とは、他者への思いやりや配慮という心理的安全性が確保された状態の中で守られていかなければ、実践できないということも語り合いを通して分かち合うことができ、改めて口に出して感謝を伝えていくことが多くなった。

ノンコンタクトタイムの実施に関しても、集中できる場所を確保することで保育を気にせずに書類に取り組めるようになった。また、書類の内容を精査し、個別月案に関しては、矢印や箇条書きを用いて時間の短縮に努め、経験や得手不得手関係なく書き込めるように変化させ、事務仕事の効率化を図った。ひとつひとつの仕事にやりがいをもって、「自分の存在意味」を見つけられるよう振り返りのワークを行うことで、職員自身がかけがえのない一人として自信がもてるように取り組んだ。

ワーク１



ワーク２



ワーク１：階層別会議
ワーク２：ありのままってどういうこと？

振り返りと今後に向けて

３回の訪問を通して、「ありのまま」を改めて考える機会となった。「ありのまま」と一言で言っても、職場においてはルールが伴ったり、職員が互いの思いや状況を推し量りながら共働していること。そしてそれには互いを尊重する心理的安全性が保たれていなければ困難であること。職員同士の語り合いを通して「ありのまま」の多面的な意味を再確認することができた。そして、全員がぼんやりとそのことに気付いているけれど、それを丁寧に分かち合う時間を持たなかったために、こじれていたこともあるのだと気付いた。配置人数が多いことを子どもだけに還元するのではなく、保育者の対話の時間やノンコンタクトタイムの保障にも十分に還元していく中で「ありのまま」でよい関係性を育んでいきたいと思った。単年度で終わらないように、園内研修を通して、言語化や対話の機会を継続的に行い、「当たり前」を見直していく事や、職員一人一人がかけがえのない存在であることを意識していきたい。

社会福祉法人青い空保育園　上用賀青い空保育園

発達の連続性を踏まえた自園の保育を構築する「午睡」編

コーディネーター：洗足こども短期大学　井上　眞理子氏
バディ　　：洗足こども短期大学　加藤　翼氏

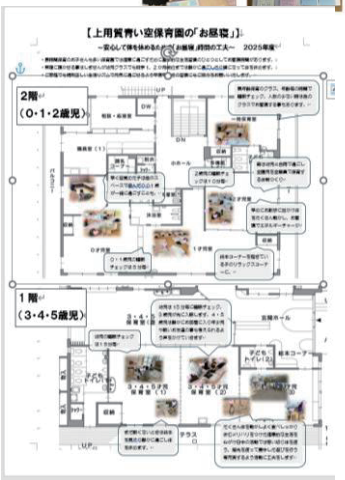
年度当初の状況と課題

昨年、園長主任の交代があり新たな園組織となった。また職員それぞれが経験してきた保育観の違いをすり合わせ、自園の理念、方針を基本に発達の連続性を踏まえた自園の保育の軸を構築したい。そして子どもが好き、保育が楽しいと思う経験を語り合える職員集団にしていきたい。

取組みの内容

【1回目訪問】
①「保育をしていて楽しいと感じた事」
②「子どもの主体性を尊重したいが成長に必要な支援も進めたい時の葛藤の場面」について意見交換。
（取組み１）全クラス共通の葛藤の場面で見えた「午睡」をテーマに決定。状況、課題、対策をクラス毎に整理。
【2回目訪問】
各年齢での①午睡の意味・目的②達成されるための課題・改善点③実現可能なアイディアを職員から引き出し、共有。園全体で協力体制を確認。
（取組み２）
実現可能なアイデアの進捗を共有、協力体制を確認。
実践し内容のマップ化。
【3回目訪問】
一年間の取組みの成果を振り返り、次に繋げる課題を抽出。
（取組み３）
発達によって変化する午睡の環境や関わりを3期に分けてクラス毎に表を作成し可視化、職員周知。
お昼寝マップ、園だより掲載、園内掲示で共有。

「０～５歳児の午睡について」園内研修の様子



振り返りと今後に向けて

コーディネーターとの意見交換会の中で「職員の経験やクラスを超えて話し合える風土がある」園の強みに気付く事ができた。また、一つのテーマについて年間を通して取り組み、話合い、実践し、共有し、成果を視覚的にまとめる等職員同士の連携や協力体制、保育を語る機会も増えた。今後も保育の葛藤の場面について、これまでの方法に捉われずクラス、担当を越えて「語り合い」を深め、自園の保育の構築に努めたい。

世田谷区立給田保育園

遊びを継続し、選択できる環境づくり

コーディネーター：昭和女子大学　遠藤　純子氏

バディ　　：昭和女子大学　鈴木　祥子氏

年度当初の状況と課題

特に幼児の部屋の狭さ、場所の確保の難しさから、生活の区切りで遊びを中断せざるを得ない環境があった。子どもたちから「もっと遊びたい」と声があっても、場所や時間等のこともあり、悩みや迷いを感じていた。

取組みの内容

①まずは何ができるかを考える

場所がない・・どこかないかな？？

↓

絵本コーナーをもう少し広げれば遊ぶスペースができるのでは？？

狭く、棚でいっぱいだったスペースを整理してテーブルやベンチ・緑を置いてみました。窓からは園庭の木やビオトープが見渡せます。

メダカもいるよ。みんなの癒し

②どんな場所にしたい？（今大事にしたいこと）

職員の思い

- 遊びの保障、継続して遊べるようにしたい
- 遊びのスペースを確保
- 他クラスと交わって食事をしたい

＝ 子どもたちと思いは同じだった そこで‥ ＝

子どもの思い

- レストランみたいにしたい
- ここでほっとしたい
- 音楽が流れているといいな

↓

ランチルームはじめます

ごはんを早く食べたい子は、ランチルームに行く。いっぱい遊びたい子は、部屋やテラスで食べる。

最初は食べたい子が多くて、すぐに満席に…（約２０席）。
そういった経験もしながら、保育者と対話したり、自分で考えるようになる。

食べ終わった子は、４・５歳の空いている部屋で遊ぶ。遊ぶスペースが広がった。

なんだか子どもたちの食べ具合が良くなったかも。（これは環境の変化もある？）

食べる時間を自分で決めるようになった。

調整する力・見通しをもつ力も少し育ってきた。

③ランチルームだけじゃもったいない！
どんな風に活用していく？

子どもたちの声を聞いての職員の意見

＊子どもたちの居場所の１つになるといい
＊行きたいときに行ける場所にしてあげたい（行きたいと言える選択肢として当たり前になる）
＊一人で遊びたい時、少人数で集中したい時にもいいのでは（遊ぶ場所の保障）

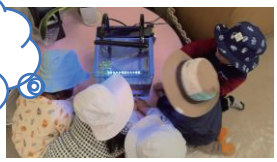
子どもたちに聞いてみました

＊陽があたって気持ちがいいからほっとする場所にしたい
＊作品も飾りたい
＊積み木は崩れてしまうから写真をとって飾りたい
＊この部屋の名前もつけてみたら？

課題もある

- 行きたいときに行けるといいけれど、安全は？行けない時間帯もある
- でも、子どもたちから「行きたい」と発信するようになってほしい

小さい子たちもメダカを見てほっとしています。



お迎えの時に一緒に絵本をみる**ほっこりスペース**にもなっています。

振り返りと今後に向けて

子どもの姿から保育者の迷いや悩みがあり、始まった取組みであった。子どもの思いを軸にしながら、職員がどのように環境を整えていくか、意見を出し合い考える機会となった。このちょっとしたスペースができたことで、「時間を選択する」「自分で見通しを持つ」という姿にもつながっていったと感じる。積み重ねてきたことで子どもの意見を聞きながら、「居場所になる」という次への展望もみえてきた。子どもが選択できる環境になったからこそ、また新たな迷いもある。この環境を活かしながら、引き続き遊びの継続とともに、子ども・保護者・職員皆が心地よい居場所となるように取り組んでいく。

世田谷区立給田幼稚園
園と幼児の実態を よさや強みとして活かす
～保育WEBを使って～

コーディネーター：千葉大学　佐藤　有香氏
バディ　：洗足こども短期大学　飯村　愛氏

年度当初の状況と課題

園や幼児の実態から、以下の願いや課題をもっていた。
①園児数減少により、少人数を活かした保育の充実を図りたい
②全教職員が力を発揮し、情報共有して保育を進めていきたい
③自然豊かな園庭環境の充実を図り、室内環境とつなげたい
④年間指導計画の見直しに取り組みたい

取組みの内容

〇保育WEBで記録してみよう！…これまで週案の日々の記録は、日毎の出来事や読み取りを書き出したり、写真を加えてドキュメンテーションのようにする形式であった。そこにWEB記録を取り入れたことで一人一人の幼児の姿や楽しんでいることの実態や、教師の援助の様子が可視化され、遊びの充実や変化、幼児の学びや育ち、そして課題がより明確に捉えられるようになった。また、教師の援助の振り返りや、準備する教材や環境設定の工夫を書き込んだことで、その後の変化や広がりを継続して記録できるようになった。→①

〇保育WEBを作ってみよう！…幼児の遊びの中からごっこ遊びに焦点を当て、全教員で大きな保育WEBを作成した。写真を見ながら、遊びの中で「経験していること」「ねらい（願い）」「教師の援助・環境」を出し合い、さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどこにつながるか、で分析した。小学校との合同研究会で研究保育をした際にも掲示し、幼児期の「遊びは学び」であることや架け橋期の教育についての理解につながった。 →①②

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で分析

〇園庭と室内の自然をつなげるアイデアを職員からもらおう！…「園庭と室内をつなぐWEB」を掲示し、全職員に気付いたことを付箋に記入し貼り付けてもらった。支援児と関わりながら、担任とは違った視点で幼児や環境を見てくれている介助員からの発想や実現に向けての協力を得ることができた。→②③

振り返りと今後に向けて

コーディネーターより、自園で取り組んでいることを、都度、評価していただいたことで、自分たちが行ってきたことや挑戦してみようとすることの認めや後押しをしていただいた。①から③については、同じ場面を複数の目で多面的にみることの大切さや面白さを感じることができた。多職種によるチームワークがこの取組みを支えたと思う。保護者からも、子どもたちの温かな関係や教師・職員の丁寧な援助、園庭環境や空間の広さの活用等の評価を得ることができた。今後も引き続き取り組んでいきたい。

④の年間指導計画の見直しについては、上記の取組みなど、幼児が楽しんでいることや経験していることの読み取りを積み重ねていくと、おのずと年齢や発達による違いやねらいが明らかになり、指導計画につながっていくとアドバイスをいただいた。幼児の姿を主体にした指導計画作成を工夫していきたい。

世田谷区立豪徳寺保育園
みんなの『やってみたい』を叶えられる職員集団を目指して

コーディネーター：東京成徳大学　坪井　瞳氏
バディ　：十文字学園女子大学　近藤　有紀子氏

年度当初の状況と課題

ベテラン職員が多く、また自然が多い園庭環境から、様々な保育実践を行っているが、それらを園全体で共有したり、職員皆が主体的に取り組むことができているかが課題であった。そのため、園内研修や『すくわくプログラム』を通してよりよい職員集団づくりに取り組んだ。

取組みの内容

○第１回訪問

アドバイス：職員一人一人が自分の良さに気付くことで自信につなげ、園内研修は互いにその良さをいかす場として考え、主体的に園運営に関わることが大切。

実践：意見交換会を行い、相手の良いところと、それを保育の中でどういかしてほしいかを伝え合う。

その後の取組み

園内研修を『エンジョイ☆プロジェクト』と命名し、自分のやりたい事ができるよう、内容を出し合い、人数の差やクラスを考えずに選んでもらいそれぞれのプロジェクトをスタートさせる。

○第２回訪問

アドバイス：各プロジェクトの進行状況報告へのアドバイスをもらう。プロジェクトを通して、互いの良さに着目し、実践に力を付けていきたい。自分の考えや想い、悩みを言語化することも必要。

実践：自分の考えや想いを書き出すワークを行い、管理職が職員一人一人の「いま」を受け止めサポートにいかす。

その後の取組み

各プロジェクトがアドバイスをいかして進む。リーダー会では第三者評価で出た意見（リーダーの役割と若手の主体性）と向き合い、ミドル層が力を発揮する為にどう支えるかを話し合う。

○第３回訪問

アドバイス：『やりたいけれどできない』と思い込んでいることも、『小さなできる』を探すことで前に進んでいく。

実践：乳児と幼児に分かれ、各年齢で共通して話せる場面（食事）について大切にしていることや改善できることを話し合い、実践している。

振り返りと今後に向けて

今回、コーディネーター派遣を受け、自園の強みや課題を再確認し実践することとなった。実践に取り組み試行錯誤する中で、少しずつではあるが「みんなで考え取り組む」ためのプロセスが確認できた。取組みを通して、自園の課題を捉える視点も職員一人一人が言語化することで変化してきた。これからも“子どもにとって”を主軸に話し合いを重ねながら、職員の心理的安全性・自己開示・対話・情報共有・主体性をキーワードに、一人一人が尊重され、必要とされる場を基盤に、保育の改善を進めていきたい。

世田谷区立世田谷保育園
子ども主体の遊びや生活を捉える目を培う

コーディネーター：昭和女子大学　遠藤　純子氏
バディ　　：昭和女子大学　鈴木　祥子氏

年度当初の状況と課題

規模の大きい自園では、これまで学年単位の保育が基軸であった。保育の質ガイドラインが改訂され、学年の垣根を越えて園全体が同じ方向性を向き、子ども主体の保育を実践するには、具体的にどのような取組みを進めていったらよいか、語り合いを通して課題に取り組むこととした。

取組みの内容

① 子ども主体の保育とは… "子どもの心が動くとき" を捉える
～学年だよりを通して、
保育の中で大切にしている事を語り合う～

・語り合いを通し、子どもの心が動くときは、保育者の心も動いているという視点に気付き、子どもの小さな発見・探求を保育者も共に楽しみ、かわいい姿を真ん中にして語り合おうという風土が自園にあるということに気付く機会となる。
・探求の姿を多く取り入れた学年だよりを、各学年で毎月配信している。保護者の方からの感想をもらえる工夫を、実践してみる。

② 新しい視点での取組みを振り返る
～実践から得た学び・気付き・変化を語り合う～

・語り合いを通して、子どもの思いを叶えたいという職員の思いはひとつ、と分かり合えたことで、学年の垣根を越えて、好きな場所で好きな遊びを選んで過ごす保育に一歩前進することができた。
・学年だよりを掲示し、保護者から付箋で感想を寄せてもらい、励みになった。

子どもの心が
動くとき

振り返りと今後に向けて

保育の質ガイドラインを基軸に自園の保育をどのような方向性で、職員間で共通認識を持つことができるか、試行錯誤しながらのスタートであった。語り合いを通して、保育者一人一人の子どもに対する思いの方向性が共有され、ガイドラインに照らし合わせてみると、実践していることに結びついていることが多くあり、保育者のモチベーションアップにもつながった。コーディネーターとの語り合いを通して、具体的なアドバイスや自園の強みが言語化され、職員で力を合わせて子ども主体の保育をこれからも推進していこうという力につながっている。

社会福祉法人正道会　世田谷ほしにねがいを保育園

遊び込める環境創りと保育者の関わり

コーディネーター：東洋大学　　深津　さよこ氏
バディ　　：東京都市大学　室井　眞紀子氏

年度当初の状況と課題

限られた空間の中で、子どもたちの安全を考えるあまり、これまでは保育室の使い方やレイアウトをほぼ変化させることなく過ごしていた。同時に保育者の関わりもどこか自分本位であり、一辺倒なところがあった。そこで今年度は、子どもが好きな遊びに没頭して遊び込める環境と保育者の関わりについて考察することで、子どもの姿から始まる豊かな保育と支援を考えたい。

取組みの内容

園庭をもたない小規模園で、子どもの育ちに相応しい環境を考える中、今ある「空間的環境」「物的環境」保育者としての「人的環境」を最大限に活かした保育実践に向け、改善すべき点を洗い出した。

【今回気付くことができた課題と対策】

①０、１、２歳児の発達に相応しい環境創り

安全に過ごそうと狭く使い過ぎていた→パーテーションの配置を変更して、室内を大きく使い、子どもの発達上いつでも身体を動かしたいという願いが叶えられるレイアウトにした。

Before

⇒

After

②狭い室内での音の響きを考察

ブロック・車など玩具の音や声が必要以上に響いていた→玩具との相性により、マットを変えたり、手作りの車と道路の描かれたマットにしたりする。遊びの音が変化し、室内の慌ただしさが抑えられ、没頭して遊べるようになった。

また、音を吸収する壁面に変更することは難しいが、保育者の声かけのボリュームやトーン、言葉選び、回数を意識することで、関わりの質を高められた。

③取り入れる頻度が増えた感触遊び

室内遊びへの固定観念があった→暑い夏でも室内で砂遊びを実現。子どもたちのリクエストで回数を重ね、広さや場所、素材に柔軟性が生まれ、「保育は子どもと一緒につくるもの」という考えが浸透していった。

振り返りと今後に向けて

この事業に参加させていただき、自分たちだけでは捉えられなかった気付きが得られ、その課題と向き合い、考察した改善策を実践することで保育そのものが変容していった。その実感は大きな喜びとなり、より一層質を高めたいという原動力となって、対話と実践が自然に繰り返されるようになっている。コーディネーターの助言のもと、園内の風通しの良さを活かして、語り合いの時間を仕組み化した結果「子ども理解」も深まってきた。自園の保育に支援と応援を受けながら、保育の在り方と向き合えたことで、環境と保育の質に変化が起きたことを大変嬉しく思っている。今後も、子どもを育む環境の豊かさと専門性を考え続けたい。

世田谷区立桜保育園

子どもたちが主体的に遊べるような園庭環境づくりを実践していく・・・
そのために職員はどう行動していくか？

コーディネーター：大妻女子大学　坂田　哲人氏
バディ　：洗足こども短期大学　伊藤　路香氏

年度当初の状況と課題

自然物がなかなか根付かず、子どもたちに自然との関わりを持たせたい、また子どもの想像力や主体的に遊べる園庭環境を整えていきたいと考えていた。

その環境づくりをどのようにし、主体的に取り組むことができるかを園内研修の中で図っていた。

取組みの内容

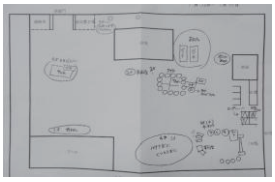
１回目は「こうなってほしい園庭像」の共有を職員間で図った。グループでの活動であったが、個人から始めることも大切に進めた。

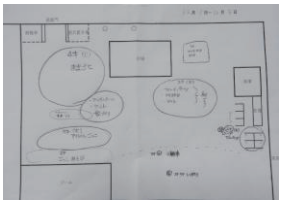
２回目は、コーディネーターとの話し合いを経て、経験年数別グループごとに課題を抽出した。若手は園庭の環境マップの作成を、中堅は子どもたちの遊びの文化づくりを、ベテランは若手や中堅が見通しをもてるようなサポートを、それぞれ行った。

３回目は、それぞれのグループが取り組んだ内容の報告を行った。その中で若手から「マップの作成を今後どのように活かせばよいか悩んだ」と発言があったが、話し合いの中で、マップの作成自体に意味があるということに気付いた。また中堅は、「ひとまずやってみよう」という意識のもと、子どもの様子を見て活動を変更したり環境を再構築したりしながら保育実践を重ねてきた。これらは、保育者間で対話を図ってきたことの成果であることに気付くことができた。

子どもたちがマルチパーツを使って自由に遊ぶために最低限のルールを説明する。

屋根をつけるには、板のバランスが難しいことに気付く子どもたち。小さい子が入る時は板からござに変更することも子どもたちが考えた。





マップを作成し振り返る中で、図面にした方が分かりやすいことに気付く。

振り返りと今後に向けて

取り組んでいる間、職員は模索しながら進めてきた。どうしても結果を求めがちだが、この取組みを通してより多くの対話を行い、桜保育園の保育を確立してきたように思えた。

子どもたちがやりたい遊びや活動ができるような保育の実現に向け、子どもの姿を通して保育を振り返り、対話をしていくことが重要である。職員自らが主体的に仕事を進められるよう管理職やベテラン職員は心理的安全性を保障した関係づくりの構築に努めていくことが大切と改めて感じた。

世田谷区立太子堂保育園

異年齢保育の中で生まれる主体性とは？
職員体制が厳しくても、楽しんで保育できている秘訣は？

コーディネーター：浦和大学　大村　あかね氏
バディ　：千葉明徳短期大学　郷家　史芸氏

年度当初の状況と課題

年度始めに職員で話し合い、今年度は「子どもが主体的に過ごせる保育」をテーマに保育をすることとした。主体的に過ごせる環境や、太子堂保育園の強みである異年齢児の関わりの中での実践をどう行っていくか、保護者への報告の仕方も課題であった。また、配慮児が多く職員体制が厳しいが、だからこそ子どもも保育者も楽しめる保育を実践したいという思いがあった。

取組みの内容

１回目の訪問時に子どもが主体的に過ごせているか、主体的に過ごせる環境はどんなものかを話し合った。コーディネーターから「子どもが本当の気持ちを出せているかの確認をしているか」「保育者が遊びのモデルになることも必要」などのお話をいただき課題が見えた。また、保護者に伝えることも自己評価として必要であることも気付かされた。

主体的な活動

子どもは・・・
子ども会議→4・5歳児イベント開催

↓ あこがれ
小さいクラスの参加
↓ 喜び・自信
意欲につながった！

保育者は・・・
主体性についての語り合いが多くなる
↓
深く振り返りたい
↓ 職員体制ピンチ！
ますますクラスを越えて助け合うことが必要
↓ チームカアップ！
子どもの意欲向上を感じ、それを職員同士が共有することで、子どもたちにとって楽しい保育を保育者も楽しめるようになった

保護者に向けて・・・
今まで通りの保育の活動報告のお便りや壁新聞に加え、取り組んできた主体性についてのお便りや保護者会での取組み報告など専門性を意識した公表を行った。

地域に向けての公表では近隣の保育施設の方に保育を見ていただき、感想や意見をいただいたことで園の保育を振り返ることができた。

振り返りと今後に向けて

子どもが主体的に過ごせる保育の実践を行っていくためには、保育者が同じ意識で保育を行っていく必要がある。今回の事業を受けて、自園の保育の語り合いや振り返りを深く行うきっかけになった。また、外部の方からの意見や感想を伺うことで自園の強みも改めて感じることができた。今後も異年齢児が関わる保育を通して子どもが主体的に活動できるよう、保育者も楽しみながら保育の実践を行っていきたい。

社会福祉法人福翠会　第二いちご保育園

新たな視点からこれまでの保育を振り返り、保育の質を高める

コーディネーター：大妻女子大学　石井　章仁氏
バディ　　：大妻女子大学　樋口　陽子氏

年度当初の状況と課題

本園は来年度で開設10年目となる。開設当時からの職員や新規採用職員が多く在籍しており、年齢層も20代が中心となっていて活気が溢れる保育園である。

反面、自分たちで作り上げてきた保育しか知らないという課題もあることから、多角的な視野を持って他園への研修も多く取り入れてきた。本事業を通じて、第三者の目線から客観的に保育をみてもらうことで、より質の高い保育を目指していきたいと考えた。

取組みの内容

＜コーディネーターと検討したこと＞	＜取り組んだこと＞
●意図的に設置した「ゾーン」はあるが、子ども発信、子ども自身が広げる「拠点」を作ると遊びがより広がる。	共有し改めて子どもが遊びを広げる姿に気付けるようになった。今後はフレキシブルゾーンを検討している。
●行事の活動では、参加したくない子がいられるスペースを作ると、子ども自ら参加を選ぶことができる。	行事の活動を行っている隣の部屋を開放して自由に行き来できるようにした。自分のペースで参加する姿があった。
●２歳クラスでは「可笑（おか）しみ」を職員で共有すると、より子どもの発見に気付いて余裕を持った言葉がけにつながる。	「可笑（おか）しみ」とは何か？話し合って、感じたことを共有した。若手職員も余裕を持った言葉がけを意識できた。
●０・１歳クラスでは子どもが選んで生活できるような環境を保障する。食事では子どもをせかすことのないようにできたらよい。	遊びの空間を自由に行き来できるよう環境を変えた。子どもの行動を止める声かけが減った。

振り返りと今後に向けて

３回の支援を受けて、雰囲気・環境・言葉がけに変化が見られたと評価をいただけた。支援を受けた後に課題に対して取組みができていない部分もあったが、職員で共有したり感じたことを話し合ったりすることが、変化につながったのではないかと思った。アドバイスを素直に受け止め、共有し感じたことや気付きを話し合えることは園の強みであると再認識でき、自信につながった。今後は、ゾーン保育の良さや弱点を園全体で話し合ったり、子どもが遊びを選択するだけでなく、自分たちで生み出したり、広げたりできる環境や活動内容を考えていきたい。

世田谷区立玉川保育園

豊かな心を育む園庭あそび　～子どもも保育者も主体的に～

コーディネーター：洗足こども短期大学　尾根　秀樹氏

バディ：埼玉純真短期大学　　片口　桂氏

年度当初の状況と課題

『子どもたちが主体的にあそびを展開できる園庭環境の充実』をねらいとし、幼児クラスを中心に“どのような園庭にしたいか”を話し合う機会を設けた。職員それぞれのやりたいことについても語り合ってきたが、具体的に進んでいない現実があった。

取組みの内容

コーディネーターの助言をもとに園庭マップを作るなど可視化をし、職員が4つの少人数グループに分かれ語り合いの場を増やし、取り組むことにした。

♫園庭の楽しいポイントを探る　→　**皆で解決**　→　**エントランスに掲示**

【草花チーム】子どもと花壇作りを行う。石や木を取り除き、枯れ葉や培養土を混ぜた。職員が雑草を持ってきたり、近所のねこじゃらしやおしろいばなを移植したりした。⇒**花の色や形の違いに気付いた。**

【ままごとチーム】草花や水を入れた時に色が分かりやすいよう透明容器や内側が白の食器をローワゴンに揃える。木製テーブル、椅子、マルチパーツなど数を多めに揃えた。⇒**イメージが膨らみ、「みて!」の声が多く聞かれた。**

【泥チーム】砂とは異なる黒土の泥場を作る。感触あそびやままごと、泥だんご作りなどを行った。⇒**異なる感触により、こねる、たたく、混ぜるなど子どものイメージが膨らんだ。**

【虫チーム】子どもの目線の高さのプランターに雑草を植えたり、朽ちた丸太を置いたりして湿ったエリアを作った。⇒**カマキリの産卵シーンも子どもたちと観察した。**

振り返りと今後に向けて

職員の語り合いの中で、個々の思いを丁寧に出し合い、互いの考えを認め合ったことで、グループ活動をスムーズに進めることができた。子どもの声、子どもの気持ちを丁寧に拾い、職員間で共有した。グループ活動でやりたいことがより明確になり、子どもが主体的に過ごせる園庭の実現の第一歩となった。

また、４グループの活動をお便りで配信し、エントランスにも掲示することで、子どもの姿や保育の取組みを保護者と共有することができた。

今後職員体制が変わっても、今までの経過が分かるようにし、各グループの課題や今後の取組み方を明確にしながら、継続や発展をさせていきたい。

世田谷区立ふじみ保育園

やってみたい！を叶える語り合い　～伝え合える組織づくり～

コーディネーター：東京家政大学　　堀　科氏
バディ　　：東京立正短期大学　鈴木　健史氏

年度当初の状況と課題

子どものやりたいを叶える組織づくりを通して、保育実践の質向上を目指したい。自園には恵まれた環境があり、それをいかせないか、子どもの姿をもっとたくさん語り合いたい、という思いがあった。

取組みの内容

第１回　やってみたいを出し合おう！

２つのチームに分かれて、保育者一人一人が「やってみたいこと」を付箋に書き、互いに共有した。

それぞれのねがいから保育に対する考え方をお互いに知ることができたのは大きな成果！

出し合ってみたら、すぐにでも取り組めるのでは？という内容も多くあり、その後の保育の中で早速実践できたこともあった。

第２回　うまくいったこと・課題・継続するための仕組みづくり

第１回の「やってみたいこと」から、実際に取り組んできたことを可視化した。今後取り組みたいこと、話し合いを継続するためにどのような仕組みが必要か、について意見交換会の中で話し合った。

第３回　１年間の保育の振り返り
～やってみたこと、できたこと～

保育の振り返りとして話し合った中で、２回目に話した内容が実践できていたことが明らかになった。

今年度語り合える時間を多く持ってきたことで、職員の実感としても「相談しやすい」「やってみたいと声を上げやすかった」という声があり、意見を出しやすい組織づくりが進められたことが実感できた。

語り合いのポイント
- フラットな関係で話そう
- 評価されるものではない
- ざっくばらんに保育者の思いを聴きたいというスタンスを意識してきた

振り返りと今後に向けて

「やってみたいを叶える組織づくり」をテーマに掲げて今年度の園運営を行ってきた。昨年度、土台を作ってきた保育者同士の語り合いの機会を継続し、様々なテーマ、様々な年代での話し合いを重ねることができた。それにより、保育の中での連携が高まったという実感を持ち、保育にいかすことができたことが大きな収穫だった。今回コーディネーターのサポートのもと、話し合いや取組み内容を整理した。今後に向けては年度が変わり、メンバーの入れ替わりがあっても、語り合いの時間を確保するために有効であった仕組みについては、継続して、組織風土を維持していけるようにしたい。

株式会社フューチャーフロンティアーズ　フロンティアキッズ上馬

意見を出しやすい風土づくり
～子どもたちが主体的に動ける動線づくりの取組みから見えたこと～

コーディネーター：東京家政大学　　堀　科氏

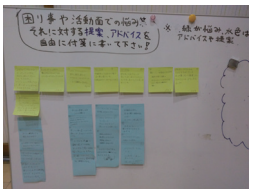
バディ　　：東京立正短期大学　鈴木　健史氏

年度当初の状況と課題

法人全体でモンテッソーリ教育を主として取り入れているが、「モンテッソーリ教具活動」と「それ以外」を分けることなく、環境構成を行ってきた。しかし、幼児クラスの子どもの興味がモンテッソーリ教具に向くことが少なく、子どもが主体的に教具に向かえるような魅力的な環境づくりに課題を感じていた。

取組みの内容

【１回目】管理職層と現場の保育者は、事前にモンテッソーリ教具の取組みに関する課題は共有していたものの、実際にヒアリングを行うと、それぞれの保育者が課題と思っていることが別に挙がってきたため、まずは全員でそれぞれの課題や悩みを共有することの必要性に気付いた。改めて課題の洗い出しを行った。



【２回目】付箋方式での意見交換を行ったが、やはり管理職層と現場の保育者との課題に対する意識のギャップがあることが浮き彫りになった。大きな問題提起からではなく、目の前のひとつひとつに向き合って話しやすい雰囲気を作っていくことを目標にした。

【３回目】クラス単位など少人数単位での話し合いの機会を増やし、意見を出しやすいように取り組んでいった。その結果「教具に興味を持ってほしい」「ゆったりと過ごせる場所を作りたい」というふたつの課題に絞られた。それに対し当該クラスの保育者から「畳を敷いてスペースを作りたい」という意見が出てきたため実行したところ、子どもが自ら少しずつそのスペースを利用するようになり、また視界に教具が入ることにより、興味を持つ姿も見られるようになってきた。その様子を見た上で、意見交換を行うと、幼児クラスの保育者だけでなく乳児クラスの保育者からも、「少しの環境の変化での効果を感じた」「乳児から同じ環境を取り入れて連続性を持たせたらよい」等の意見が出て、改めて全員が「課題→実践→変化」の循環の大切さに気付くことができた。

畳を敷いた
ゆったりスペース

モンテッソーリ教具へ
興味・関心が深まる

振り返りと今後に向けて

当初、管理職層が課題として挙げたことに保育者から異議があったわけではないが、それぞれの保育者が「自分事」として捉えられていなかった。取組みを通じて、それぞれの保育者の日々の中でのモンテッソーリ教育の捉え方や、今課題と感じていることを知ることができた。また、幼児クラスでの課題や実践を共有することにより、新たに自身のクラスでの課題に気付いたり、その実践に対して理解を示す意見が出たりするなど、全員で同じ課題を考える風土が醸成された。今後もクラスだけの問題とするのではなく、課題を共有することによって、個の課題が全体の課題となり、全員の「自分事」になるように話し合いを行っていきたい。そのためには、まず管理職層が率先して話を聞く機会を作り、保育者が感じている小さな課題を自分だけで考えなくていいと思えるように働きかけていく。

世田谷区立南大蔵保育園

子ども理解を深め、主体性について語り合い、学ぶ

コーディネーター：浦和大学　大村　あかね氏
バディ　：千葉明徳短期大学　郷家　史芸氏

年度当初の状況と課題

自園の強みは、職員同士コミュニケーションが取りやすく、声を掛け合い連携を取ろうとし、新しい事にも“一度はやってみよう”と協力し合うことができるところ。子どもたちのエピソードを良いことも気になることもすぐ話題に出し合える。一方で、主体性について、遊びでは理解が進んでいるように感じるが生活面では難しいと感じ、日々の保育の中で葛藤をしていた。

取組みの内容

第１回：子どもの主体性を大切にした保育の定義は難しい。だからこそ主体性をどう捉え、子どもたちにどのように育ってほしいかを考えていくことが大切であると学んだ。⇒給食の時、職員ではなく５歳児が自分でお玉を使い、汁物をよそうことにしてみた。すると、鍋が空になるまで食べるようになった。更に、たくさん入れるとこぼれそうになることに気付き、自分で量を考えてよそうようになった。

第２回：子どもが思いを表現するのは言葉だけではなく、「泣く」などの表情を含めたしぐさにも向き合い、理解することが主体性を大事にすることに繋がると学び、保育の中に意識して取り入れてみた。⇒泣いて主張している２歳児に対して、絵本などで遊びに誘い気持ちを切り替えるだけでなく、子どもの気持ちに向き合う環境を整えて丁寧に話を聴いてみた。すると、少しずつ自分の思いを表す言葉が出てきた。

第３回：２回目から取り組んできて手応えのあったことや、子どもの姿の変化について語り合った。⇒ラキューを色別に片付けるように変えたら、遊びの盛り上がりに変化が出て、欲しいものをすぐ探すことができ、片付けもスムーズになった。
環境を整え、素材を取り出しやすくしたところ、よく見て考えて使っている。
小学校へ向けてどんな子ども像を目指したいか、今の取組みの葛藤や課題について意見を出し合った。⇒集中力をつける、メリハリをつけた生活、思いやり、あきらめない気持ち、認め合って受け入れる気持ち、失敗してもいいと思えること…などが意見として出された。

振り返りと今後に向けて

主体性について理解を深めようと意識して取り組むことができたが、３回目の語り合いで「小学校へ向けて」とテーマを出した時に、集団や時間を意識した意見が増えた。この一年、試行錯誤しながらも実践してきたことで、実際に子どもの姿が変わった。その姿は、就学後の学びに繋がる育ちの姿であるということを、職員が理解し、自信を持てるようにしていく。そして、自分たちが子どもたちの育ちを支えているという自信を、更に引き出していけるよう、今後も職員同士で語り合い、支え合いながら主体性を育む保育を日々の実践の中で根気よく積み重ねていきたい。

世田谷区立南八幡山保育園

子どもの声・行動からの仕掛け　～『待つ』を意識して～

コーディネーター：大妻女子大学　坂田　哲人氏
バディ　：洗足こども短期大学　伊藤　路香氏

年度当初の状況と課題

『子どもも保育者も主体的に…楽しい保育の実践』を目指していたところ、子どもがやろうしていることを保育者の声で止めてしまっているのではないか？という気付きが出る。そこで**「保育者の声を減らし、もっと待ってみよう」**待つことで子どもの姿から見えてくるものは？について深めていくことにした。

取組みの内容

＜ステップ１＞
～子どもに声をかける前に『2秒待つ』『子どもの前に回って』を意識しよう～
待ったことで子どもの何を理解し、保育者自身の対応の変化にどう繋がったのか。そして子どもの姿にどんな変化があったのか。
＜ステップ２＞『待つ』ことが定着してきた。そこで一歩進み…
～「なぜ待ったのか」「どのくらい待ったのか」待つタイミング、待つ理由は人それぞれであることを理解して、意見交換をしていこう～

気付きが大事

実践を記録しよう

「問いかけ」付箋からの意見交換

＜実践事例を基に振り返り＞
ステップ１：肯定的な意見から共感し合うことが主となる。
ステップ２：遊びが発展していく過程で『待つ』という仕掛けはどのタイミングで実践されているのか？
そこで『遊び』の事例から「待つタイミング・理由」等に視点をあて「問いかけ」を意識した意見を出し合う。
⇒「なぜこうなったのか‥」等、深掘りした活発な意見交換となり新たな気付きや、さらに探りたい課題が見えてくるようになる。

振り返りと今後に向けて

『待つ』は、子どもたちの『今』を知るきっかけとなり、その『今』の理解が保育者の声を減らすことに繋がっていること、『待ってもらえる安心感』を子どもたちが感じとれることを実感できる取組みであった。また他者からの「問いかけ」が、保育者自身の、そして園全体の保育を見直す気付きになるものと実感できた。
まだまだ子ども理解には学びが必要である。子どもたちの『今』を大切に、その『今』がより発展していけるよう、私たち保育者も主体的に保育を楽しんでいきたい。常に「問いかけ」ながら・・・。

社会福祉法人杉の子保育会　遊愛保育園

ドキュメンテーションの活用とウェブを用いた遊びや関係性の可視化

コーディネーター：玉川大学　岩田　恵子氏
バディ　：宮前おひさまこども園　亀ヶ谷　元譲氏

年度当初の状況と課題

・ドキュメンテーションの主な使い方は、保護者と子どもの姿を共有するもの
・部屋を共有する職員の感覚や経験で遊びや環境を考えていくことの困難さ

取組みの内容

①６月２４日　遊愛保育園の特徴と課題について伝え、それを踏まえて、コーディネーターが全クラスを見学する。クラス担当と各部屋の環境の気に入っているところ・盛り上がっているところを語り合い、遊びの環境について子どもと一緒に考えていくことも大切だと気付いた。
②９月１７日　保育まとめという全体会議でコーディネーターから実際に学生や他園で作成したウェブを見せてもらう。その後、各担当に分かれテーマを決め、実際の子どもの遊びの広がりを書いてみる。
零歳児：体を動かすこと　　１歳児：テラス　　２歳児：ままごと
幼児：積み木・ごっこ遊び　　だいどころ（調理室）：バイキング
③１月１４日　９月に書いたウェブに職員がエッセンスを加えた内容や実際の子どもの姿を色分けして書いていったものをコーディネーターと共有し、分析しながら、遊びの広がりを実感した。

岩田先生が学生のウェブを解説

赤・大人の関わり、青・子どもの姿

９月　　１月

実際にウェブ展開してみる

振り返りと今後に向けて

ドキュメンテーションは、保護者に伝えるツールだけに留まらず、子どもが遊びを振り返ったり、思い出したりして、遊びの再構築に繋げられるものであることを感じた。また、ウェブを展開することで遊びの広がりを可視化したり、子どもたちの関係性を複数の職員が把握できたりすることが分かった。職員から子どもの遊びが停滞している時の関わり方が分からないという声も出ていたが、ウェブを使って子どもと一緒に考えたり、相談しながら遊びを作り上げたり、遊びを展開するツールにしていこうと話した。子どもを真ん中に！を合言葉に保育をしているが、今回の取組みを通して、これを体現するためのひとつの具体的な方法を学ぶことができた。
コーディネーターの視点やアドバイスが全て学びで、新しい気付きがたくさんあった。わくわくを子どもたちと一緒に考えていきたい。

世田谷区立わかくさ保育園

保育者の主体性を考える

コーディネーター：大妻女子大学　石井　章仁氏
バディ　　：大妻女子大学　樋口　陽子氏

年度当初の状況と課題

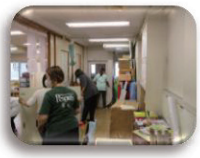
これまで「園庭環境の充実」という取組みを行い、園庭環境を考え工夫したことで子どもたちの遊びの姿も変わり、職員間では意見が言える職場、より良い環境づくりを目指していける関係性が強みとなっている。次に見えてきたのは、“物的な環境が整ったとき、人的な環境はどうか”“保育者も子どもも楽しめる、わくわくする保育をするには”という課題であった。

取組みの内容

１回目の訪問・・・園の保育の状況について確認し合い、人的環境や、子どもの主体性とはどういうことなのかを整理し、各クラスの保育を振り返り、全体で語り合った。「保育者の役割ってなんだろう」を考え、意見交換を行った。

保育者が人的環境として関わりを持つ、保育者の主体性を育むことにつながっていく環境づくりとして、「保育者の役割」を改めて考えられる機会となった。子どもの気持ちに寄り添い、適切な環境を整え、選択肢を提供することで主体的に保育をすることにつながる。子どもの主体的な活動をサポートしていけるように、今後、意見交換やアンケートをとる等、保育者も子どももやりたいことができる環境づくりを目指していくこととした。

２回目の訪問・・・１回目の訪問後、職員アンケートの結果をもとに、乳児、幼児担任に分かれてグループで語り合いを行った。「生活の場面の主体性について」と「行事と遊びを主体的にしていくためにはどうしていくか」について課題があることをコーディネーターと共有する。



やってみたいこと等を話し合う中で、予備室の有効活用について意見があり、具体的な保育者の思いも出てきた。また、時間で遊びを区切ることなく、柔軟に対応する為に、クラス担任に限らず連携することを意識していけると、子どもの主体性を大切にした保育実践が可能になっていくことを改めて学んだ。やってみてうまくいかないことも、振り返りをしながら考えていくことが大切であることに気付くことができた。

【やってみよう！】３回目の訪問を経て
- 予備室の片付け、有効活用
- ランチルームの実施検討（５歳児クラス）
- 保育者が連携することによって、時間に区切りをつけずに、園庭での異年齢交流が自然に行える環境
- 子どもの主体性を大切にするために保育者ができることを考えていく

振り返りと今後に向けて

保育者が主体的に保育をするには、計画した活動をこなすだけではなく、子どもの姿を捉え、様子を見守り、判断し行動できる意識を持つことが重要だと学ぶことができた。日々の保育の中で、子どもの行動、表情、言葉、仕草を受け止め、「今、何を求めているのか」という気持ちをもって保育をしていくことを大切にしていきたい。主体的な保育実践には、正解を求めすぎず、「トライアンドエラー」を積み重ねながら、うまくいかなかったことも大切な経験と捉え、それを振り返るプロセスを重視し、保育者としての自信につなげていけるようにしていきたい。そのためには、保育者がやってみたいと感じたことを取り組みやすい職場の環境づくりと、「トライアンドエラー」を認め合い、一緒に考え「とにかくやってみる」組織づくりを目指していく。

令和７年度乳幼児教育支援センター事業報告

１　乳幼児期の教育・保育の充実と発展

（１）教諭・保育士等の人材育成

◆研修実績　全３３回

施設	受講者数
区立幼稚園	５７
私立幼稚園	１３
区立保育園	１，２２６
私立保育施設（こども園、地域型保育事業含）	１，８２７
認可外保育施設等	１９０
合計	３，３１３

◆実践充実コーディネーター派遣事業実績

施設	園数
区立幼稚園	1
私立幼稚園	1
区立保育園	１０
私立保育施設（こども園、地域型保育事業含）	6
合計	１８

実践充実コーディネーター派遣事業地域への公表及び取組み報告会の様子

オープン保育（保育見学）

ワイワイミーティング（意見交換会）

◆モデル研究実績

研究	園数
園・校における架け橋期の教育の充実	2※
園の教育・保育の評価	3

※学び舎数

講師と施設職員との話し合いの様子

コンパスフォーラムにおいて
モデル研究事業報告の様子

（２）就学前の教育・保育と小学校以降の教育との円滑な接続

◆学び舎を中心とした連携推進

区内には、中学校の学区域を基準とした幼保小中による学び舎があります。
乳幼児教育支援センターでは、乳幼児期の教育・保育と小学校以降の義務教育との接続が円滑なものとなり、世田谷区の子どもたちが豊かな環境で安心して育っていけるように支援しています。

学び舎の参加状況（令和８年２月末時点）

施設	園数
区立幼稚園	8
私立幼稚園	7
区立保育園	４５
私立認可保育施設（認定こども園・地域型保育事業含）	１４１
合計	２０１

◆アプローチ・スタートカリキュラムの推進

就学前施設と小学校教育との接続を踏まえ、乳幼児期の子どもの育ちに見通しを持ち、より充実した質の高い教育・保育の実践に向けて、就学前施設と共に考えるために、乳幼児教育アドバイザーを派遣するなどの支援を行っています。

乳幼児教育アドバイザー訪問実績

施設	園数
区立幼稚園	1
区立保育園	3
合計	4

せたがや架け橋プログラム手引き（仮称）について

現在世田谷区では、【せたがや架け橋プログラム手引き（仮称）】を作成しています。
幼保小の架け橋プログラムとは、子どもに関わる大人が立場の違いを超えて自分事として連携・協働し、架け橋期※ にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことを目指すものです。【せたがや架け橋プログラム手引き（仮称）】は、区の特色を活かして、幼保小の連携・協働を進めるための手引きです。
【せたがや架け橋プログラム手引き（仮称）】作成にあたり、令和６年度から２つの学び舎で架け橋期におけるモデル研究に取り組んでいます（成果報告は、ｐ２～５を参照）。また、作業部会では、就学前施設と小学校の教諭・保育士を中心に、現場の実践や課題、子どもたちの姿を語り合いながら意見を交わし、実効性のあるプログラムの策定を目指して、取組みを進めています。
完成は令和８年秋頃を予定しています。
※架け橋期・・・義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間

架け橋期の子どもたちの交流の様子

2　乳幼児期の資質・能力を育む環境づくり

◆文化・芸術体験事業（大学連携）

区内の大学と連携し、幼児向けに生演奏による音楽鑑賞や演奏などの体験事業と、粘土遊び事業を実施しました。音楽体験事業では、全身を使って楽器に触れ、音の出る仕組みを学んだほか、クラシック音楽の演奏を聴きました。粘土遊び事業では、天然粘土の感触を確かめながら、思い思いのイメージを形にしました。

これらの事業を通じて、子どもの発想力を高めるなど非認知能力の育成を図ります。

昭和女子大学との連携事業
親子コンサート『ムジカ』

東京都市大学との連携事業
粘土あそび

◆配慮を要する幼児への支援（大学連携）

学識経験者が園を訪問し、配慮を要する幼児が、現在の保育環境や就学後の教育環境等において、楽しく健やかに過ごせるよう教職員向けに援助・支援方法等を助言しています。

3　家庭教育の支援（家庭教育、子育て支援のための講座・ワークショップ等）

◆すくすく広場

豊かな親子関係づくりと子どもたちの健やかな成長に向けて、子育てがより楽しくなるよう、いろいろな講座やワークショップを開催しています。

開催日	テーマ
令和7年 6月21日（土）	親子でお絵かきコドモエアトリエ
7月12日（土）	ベビーダンスでママパパもハッピー
8月23日（土）	こころ・からだ・性のことを親子で学んでみよう！
9月28日（日）	スマホのある時代の子育てを考えよう＆積木のワークショップ
10月26日（日）	育ちに合わせた絵本の選書と読み聞かせ
11月29日（土）	子どもはあそびで育つ～親子で体験！うんどうあそび～
12月21日（日）	クリスマス　親子ダンスワークショップ
令和8年 1月24日（土）	スマートフォンカメラ講座×ほめ写
3月14日（土）	親子わくわく♪探究活動～小学校の学びにつながる、はじめての探究～

◆外あそび事業

区内NPO法人と連携し、教育総合センターの屋外広場や区立幼稚園の園庭を活用し、泥あそびや落ち葉プール、木工作等を実施しました。

開催日	テーマ
令和7年 6月　7日（土）	春の陽気で色水あそびと泥んこあそび（教育総合センター屋外広場）
6月27日（金）	プレーワーカーと一緒に外遊びを楽しもう in 給田幼稚園
11月22日（土）	秋の思い出 落ち葉プールと季節の工作遊び（教育総合センター屋外広場）
令和8年 1月21日（水）	寒い冬でもぽかぽか焚火遊び in 三島幼稚園

幼稚園の築山をいかした
ウォータースライダー

大人も子どもも泥んこあそび

焚火遊びと焼き芋づくり

令和７年度　乳幼児教育支援センター研修実績

受講者数合計　3,313名

	研修名	対象	講師名（敬称略）	受講者数
人権	初任者研修（幼保小中合同研修）	初任者	佐々木　掌子（明治大学）	87
	子どもの権利研修	全職員	北野　幸子（神戸大学大学院）	132
保育実践	乳児保育研修（全２回）	基礎ステージ職員	岩田　恵子（玉川大学）	①134 ②111
	幼児教育研修（全２回）	基礎ステージ職員	室井　眞紀子（東京都市大学）	①89 ②84
	特別支援教育研修（全２回）	基礎ステージ職員	藤原　里美（チャイルドフッド・ラボ）	①103 ②119
	子どもの育ちを支える環境	基礎ステージ職員	堀　科（東京家政大学）	131
	専門研修Ⅰ 『明日につながる子ども理解と保育リーダーの役割』（全５回）	中堅ステージ職員	大豆生田　啓友（玉川大学） 三谷　大紀（関東学院大学） 髙嶋　景子（聖心女子大学）	①106 ②104 ③101 ④100 ⑤ 93
	専門研修Ⅱ『保護者との関係づくり』	中堅ステージ職員	若月　芳浩（玉川大学）	133
	専門研修Ⅲ『保育の記録・要録の書き方』	中堅ステージ職員	宮里　暁美（お茶の水女子大学）	126
	教育・保育実践コンパス研修 『子どもの力を育む保育のプロセス』	全職員	無藤　隆（白梅学園大学）	105
	園評価研修（全２回）	中堅ステージ 以上の職員	松山　洋平（和泉短期大学）	①84 ②72
	園評価フォローアップ研修（全２回）	令和６年度以前 コーディネーター派遣実施園園内研修担当者	石井　章仁（大妻女子大学） 尾根　秀樹（洗足こども短期大学）	①16 ②15
	幼保小接続推進研修 （幼保小合同研修）	全職員	吉永　安里（國學院大學）	115
園運営	管理職研修 『世田谷区子どもの権利条例』	管理職 ステージ職員	加藤　悦雄（大妻女子大学） 世田谷区子ども・若者部子ども・若者支援課	148
	マネジメント研修	管理職 ステージ職員	田澤　里喜（玉川大学）	103
危機管理	保育の安全研修	基礎ステージ職員	猪熊　弘子（駒沢女子短期大学）	116
	リスクマネジメント研修　基礎	中堅ステージ 以上の職員	関川　芳孝（大阪公立大学）	90
	リスクマネジメント研修　発展	基礎受講済みの施設	関川　芳孝（大阪公立大学）	85
保健・食育	食物アレルギー対応研修（全２回）	全職員	平井　聖子（国立成育医療研究センター）	①68 ②51
	保育保健研修Ⅰ 『感染症の基礎知識と保育環境』	全職員	伊藤　康（愛育研究所）	109
	保育保健研修Ⅱ 『子どもの眠りを考える』	全職員	福田　一彦（江戸川大学）	139
	食育研修Ⅰ『口腔機能の発達からみる子どもの食行動』	全職員	元開　富士雄（げんかい歯科医院）	138
	食育研修Ⅱ 『食物アレルギーの食事　理解と対処』	全職員	長谷川　実穂 （小児アレルギーエデュケーター　管理栄養士）	106

令和７年度　講師一覧（敬称略）

モデル研究

「園・校における架け橋期の教育の充実」

箕輪　潤子（武蔵野大学）

「園の教育・保育の評価」

遠藤　純子　（昭和女子大学）
大澤　洋美　（東京成徳短期大学）
松山　洋平　（和泉短期大学）
鈴木　祥子　（昭和女子大学）
小坂田　摩由（東京成徳短期大学）
星　早織　（和泉短期大学）

実践充実コーディネーター

〈コーディネーター〉（50音順）

石井　章仁　（大妻女子大学）
井上　眞理子　（洗足こども短期大学）
岩田　恵子　（玉川大学）
遠藤　純子　（昭和女子大学）
大村　あかね　（浦和大学）
尾根　秀樹　（洗足こども短期大学）
坂田　哲人　（大妻女子大学）
佐藤　有香　（千葉大学）
田澤　里喜　（玉川大学）
坪井　瞳　（東京成徳大学）
深津　さよこ　（東洋大学）
堀　科　（東京家政大学）

〈バディ〉

樋口　陽子　（大妻女子大学）
加藤　翼　（洗足こども短期大学）
亀ヶ谷　元譲　（宮前おひさまこども園）
鈴木　祥子　（昭和女子大学）
郷家　史芸　（千葉明徳短期大学）
片口　桂　（埼玉純真短期大学）
伊藤　路香　（洗足こども短期大学）
飯村　愛　（洗足こども短期大学）
上田　よう子　（玉川大学）
近藤　有紀子　（十文字学園女子大学）
室井　眞紀子　（東京都市大学）
鈴木　健史　（東京立正短期大学）

〈スーパーバイザー〉

無藤　隆　（白梅学園大学）
大豆生田　啓友　（玉川大学）

乳幼児教育アドバイザー

赤坂　榮　（元聖徳大学）
髙橋　かほる　（帝京短期大学）
西　智子　（元日本女子大学）
古川　由紀子（聖徳大学短期大学部）

令和7年度　教育・保育実践コンパスレポート
～乳幼児教育支援センター事業報告書～

令和8年（2026年）3月発行

世田谷区教育総合センター　乳幼児教育・保育支援課
（乳幼児教育支援センター）

〒154-0023　世田谷区若林5－38－1
TEL　03－6453－1531
FAX　03－6453－1534

世田谷区乳幼児教育支援センター

乳幼児教育支援センターの取組みをリーフレットにまとめました

教育・保育実践コンパス